

図書館

だより

第 21 号

1993. 4. 1 発行

編集兼発行

三重短期大学附属図書館

514-01

三重県津市一身田中野字蔵付157

TEL 0592
32-2341

目 次

- 図書館の扉 竹 添 敦 子 (1)
いま、トレンドィー数学—カオス・ゲーデル・南方熊楠— 杉 山 雄 規 (3)
新規受入図書案内 (1992年8月~1983年1月受入分) (5)

図書館の扉

竹 添 敦 子 (法経科助教授)

記憶の中のいちばん古い図書館は、生まれた町の線路沿いに、忘れられたように建っていた市立図書館だと思う。小学校二年のある日、友だちとかくれんぼをしていて偶然に見つけ、そのまま入り込んで鬼を困らせた。

図書館ではなく図書室となれば、記憶はさらにさかのぼる。小学校に入学した翌日、担任の先生に学校を案内してもらった。迷路のような木造校舎の二階、教室ふたつ分の広さのそこに、何種類もの童話の全集が並んでいて、わあーと声を出したのを覚えている。このときの印象はよほど強かったとみえ、今でもひんぱんに夢に出てくる。ただ、この図書室にはなかなか入らせてもらえなかった。団塊の世代が上級生にひしめいていた時代である。とうてい千五百人の児童に対応できる図書室ではなかった。しかも、一年生はこの棚のものを読みなさいと決められたそれは絵本ばかりで、童話の全集をねらっていた私はふんまんやるかたなかつたのである。だから

四年生で転校するまで、私の図書室はもっぱらくだんの市民図書館であった。

子どもの目から見ても、この図書館はひどいものだった。そもそも図書館といえるような代物ではない。おそらく公民館か集会所を兼ねていたのだろう。蔵書は少なかったし、あちらにひとかたまり、こちらにひとかたまりと並べられてあるものも、ろくな書籍ではなかった。おとなにとっても子どもにとっても中途半端で、そのうえ「客」が少なかった。少ないどころではない。いつも私だけなのである。事務員らしき女性はいたが、この人は極端に無口で、「客」には皆目興味を持たなかった。反対に家では、母が自分は本など読まないくせに、子どもの読む本を検閲しがった。だから、学校から帰ると遊びに行くふりをして線路端まで走り、図書館の扉をそっと押す。板張りの床に腰を下ろして本を開いていけば、何とも心地よく時間が過ぎていった。

この図書館は私だけの、まぎれもない秘密の場所であった。学校の図書室で満たされないうん、ここではさまざまな本を独占できた。学校と同じ本もあるにはあったが、上下本など揃っているのはまれであり、別の意味での欲求不満があった。ただ、制約なくあの棚の棚とさわられるのがうれしく、文字ばかり並んでいる「おとなの」本を覗くのも楽しかった。

た。子ども時代は原っぱと隅っこで形成されると言われるが、私は原っぱならぬ板の間を占有し、その隅っこで連日「おとなの」本を読みふけていたのである。

私の家はおくら町という横町にあった。このおくら町の仲間が一緒のときは、線路端には行かなかった。なぜかは知らない。探し当てた宝ものを分配する、やさしい気持ちを持っていなかったということだろう。それに、一時間五円の貸自転車に乗って月光仮面ごっこに興じているおくら町の連中は、この宝ものを喜ぶ相手ではないという勘もあった。ペンキ屋のえっちゃんや自転車屋のあきちゃんが来ないうちに、ひとりで路地を駆け抜ける。菓屋のしげきちゃんと目を合わさないように商店街を抜け、蚊取線香工場の黒い壁に沿って右に折れる。ここまで来ると、横町の遊び仲間のテリトリーから逃れることができた。おくら町の連中はとかく徒党を組んで行動したがった。彼らといるとつまらないことに付き合っ、何だか時間を盗まれているような気分になるのだった。本来、ひとりきりで過ごすのがいやでなく、原っぱより隅っこが好きだったこともあるが、誰に指図されることもなく、自分自身のために時間を使うということが、いかに大切であるかを知ったのは、この図書館での日々だったように思う。

それでも一度だけ、他の子を誘ったことがある。林さんというとてもきれいな子だった。彼女は市民病院の院長の一人娘で、巻き毛と白い肌はフランス人形のようなだった。先生も一目置くほどの優等生で、都会的な雰囲気を持っていたので、女の子たちは競って友だちになりたがった。その日は彼女のほうから、一緒に帰りましょうと声をかけてきた。林さんと帰るといっただけで、天にも昇る気持ちだった。林さんがどンドン行く道は、私の通学路とは違っていた。私は商店街を歩いていたが、彼女は線路端を歩いていたのだった。そこを歩き続けると私の家からは遠くなるばかりである。そのとき市民図書館が目に入った。突然、ここが図書館だと口走っていた。誰にも教えるつもりはなかったのに、林さんならいいと思ったのかもしれない。単に、このまま町外れまで歩いてゆく勇気がなかったのかも

しれない。あるいは、林さんと別れたくなかったからかもしれない。とにかく、今言わねばならないような気分になったのはたしかである。林さんは行ってみましょうかと扉を押した。例の女性は、ランドセルをかけたままの小学生が入ってきてても無関心で、わたしは得意になってあの本、この本と林さんに示してみせた。何だか自分の家に招待しているような気分になって、興奮気味に話し続ける私に向かい、林さんはつまらなそうに「うちにはもっといろいろあるわ」と言った。

図書館よりもたくさんの本があるという林さんの家—林さんへの憧れが、その日を境に本を持つことへの憧れに変わった。自分の本を持ったからといって、林さんのようにきれいになるわけでもないことは百も承知だった。本に囲まれたからといって、巻き毛になるわけでも、色が白くなるわけでもないことは理の当然だった。だが、本にふれるということが、林さんの優秀さや都会的な雰囲気と結びついているということは察知した。「知的」ということばなど知らなかった。もし知っていたら、林さんの持っていた「都会的」な雰囲気こそ、まさにそれだと気づいただろう。

自分の本を「持つ」ということに執着したしたのは、それがきっかけであったと思う。買って来て買って来てと親にせがんだが、路地奥の長屋暮らしでは、子どもの「贅沢」に使う金などあるはずがない。勉強机さえなかったのである。欲しいものがあれば病気になるしかなかった。りんごもバナナも病気のときには食べることができた。幸か不幸か、当時の私はひどく病弱だったので、病気のたびに本を求めた。さすがに母が近所の「まるきん」へ行ってくれる。ただ、母には「本」の意味が分からなかったので、すぐ学習雑誌を買ってくるのだった。

「まるきん」は本屋というよりは文房具屋なのだが、店頭には『小学一年生』のような学習雑誌、『ぼくら』『なかよし』といった月刊誌とともに、図鑑や少年少女世界文学全集が並べてあった。本とはその文学全集を指すのだが、母は知ってか知らずか要求を無視し続けた。私が「まるきん」に通っていることは知っていたと思う。毎日目当ての本が売れ

ていないのを確認しては、ほっとして帰る。「まるきん」の店先で背表紙の文字をながめていると、『トム・ソーヤーの冒険』が目の前で繰り広げられ、途方にくれた『家なき子』が佇み、気品ある『小公子』が微笑みかけてくるのだった。背表紙を見てもさっぱり想像ができなかったのは『クオレ物語』であった。何のことやらわからない「クオレ」ということばが、いっそう恋を募らせた。そこにはきっと想像もできない世界が書かれているのだと思うと、欲しくて欲しくていてもたってもいられなかった。たしか半年ばかり通ったはずだ。病気の枕もとに、母は黙ってそれを買ってきてくれた。このときの『クオレ物語』は百円、すっかり変色はしたが、私と息子二代にわたって愛読し、今もわが家の本棚に建在である。

自分が持った初めての本、この『クオレ物語』を私はどれほど愛したことだろう。そして主人公のエンリコが、いわゆる秀才ではないことにどれだけ慰められたことだろう。秀才とは林さんのような存在を指していた。そういえば『クオレ物語』の秀才デロッシも、林さんと同じ巻き毛であったが。ガルローネの強さも、コレッチのがんばりも、ロベッチの勇気も私には欠けていた。クロッシほどに不幸ではなかったが、父は難しいことが起きるとノイローゼになったり、わずかな貯えを株ですっからかんにしたり、職場で喧嘩をしては辞めるとわめいて母を困らせたりしていた。私はエンリコを真似て日記をつけ始めた。もっとも両親には理性も教養もなかったので、彼のように適切な助言をもらえることは期待すべくもなかったが、そこは想像力というものが補ってくれるのだった。何十回、いや何百回読んだかしのれない。結局五年生で『芥川龍之介集』を買ってもらうまで、『クオレ物語』は私のたった一冊の本であった。

奇しくもエンリコと同じように引っ越すまでの一年余、私は市民図書館に通いつめたが、ついにそこでおとなたちと出会うことはなかった。考えてみればあたりまえである。三十年昔、あんな小さな田舎町で、おとなたちが図書館に行く余裕などあったはずがない。してみれば、あの図書館の存立事情も実にあやし

いものとなるのだが、今は昔、線路沿いの建物の扉を押すときの、あの多分に秘密めいた感覚を思い出すだけである。

私自身をたどってみれば、それぞれの時代にそれぞれの図書館の光景が浮かび上がる。が、記憶の果てでゆらめいているのは、いつもあの不思議な小さな建物である。今となれば、あの日々、あの空間が夢なのか現なのかさえ定かではない。ただ、町を去って何年か後に列車で通り過ぎたとき、線路端にたしかにその建物はあった。そして、その扉を押して入ってゆく小さな私の背中が、車窓からはっきりと見えたのである。

いま、トンレディール数学

—カオス、ゲーデル、南方熊楠—

杉山雄規（生活科学科助教授）

カオス、ゲーデル、南方熊楠。この三者が、僕の頭の中で、どういうふうに関連しているのか、図書の紹介を兼ねて簡単に説明してみたいと思う。

これら三者の接点は数学にある。「カオス」は数学用語で、ゲーデルは数学者、南方熊楠は「雑学者」（？）である。南方が民族学、博物学にとどまらず様々な分野で活躍したことは良く知られているところだが、カオス、ゲーデルも守備範囲は広い。いずれも本来の数学分野にとどまらず、自然科学の基礎概念に始まって、哲学、コンピュータ、工学、経済学、社会科学など広範囲に影響を及ぼしつつある。非常に一般的で抽象的な概念における革新的なものを持っている。

カオスの意義は一言でいうと、科学的思考において当然正しいと信じられていた次の3つの信仰に対して、反例を与えたということである。その3つの信仰とは、

- 1) 法則性とは予測可能性である。
- 2) 予測が不可能であるのは、無数の原因が

絡み合っているからである。
3) 偶然と必然とは、明確に分かれた別概念である。

以上である。これらの信仰に異義を申し立てるカオスとはどういう代物か？

カオスとは「決定論的プロセス」についてのある特異的性質のことである。「決定論的プロセス」とは、ある時刻に状態が決まったらそれ以後の状態は一意的に決まって行くプロセスのことをいう。ついでに、この「時間ごとの状態の変化の軌跡」を「軌道」という。(決して量子論のような確率論的プロセスではないことに注意！)

さて、カオス的であるとは、「ある決定論的プロセスにおいて、任意に与えたデタラメな軌道を実現する初期値が1つ決められる。」ことである。したがって「初期値をわずかに変えたときの軌道は、決定論的プロセスにもかかわらず予測不可能」である。このような性質を持つ突に簡単な数学的モデルがメイによって1973年に発見された。(式は単なる2次式で簡単なので、情報処理の時間にシミュレーションしています。)このような性質を持つ力学系が1) - 3)の反例になっていることは、もう少し説明が必要かもしれないが、ここではこれ以上立ち入らない。

ごく最近(昨年)、カオスを使ったニューラルネット(神経回路網)モデルによるコンピュータシミュレーションにより、「巡回セールスマン問題」をうまく(非常に高速に)解いたという報告がある。「巡回セールスマン問題」とは「最短距離で、与えられた各地点を回るにはどういう道順をとればよいか？」という問題である。何のことはないような問題だが、これはフェルマーの大定理などに並ぶ数学の3大未解決問題の一つで、一般に「NP問題」と呼ばれている。「NP問題」とは、解に到達するまでのプロセスのステップ数(時間と考えてもよい)が「回るべき地点の数」の増加に対して指数関数的(つまり非多項式的; Non Polynomial)に増大していく問題である。

「NP問題」では、一般的に「問題」の解法に至る「ステップ数」を議論する。これは数理論理学の問題といってもいいし、コンピュー

タでいえばアルゴリズムの問題である。指数関数的に時間がかかるというのは虱(しらみ)潰しに調べるのと実はかわりがない。つまり「解いた」とは言い難いのである。「NP問題」はそのような解法しか存在しない問題の総称である。この極北(?)にあるのが「G問題」である。(Gはゲーデルのイニシャル、ゴジラではありません。)
「G問題」とは、解法のアルゴリズムがそもそも存在しない問題である。つまり「原理的に解けない問題」のことである。もちろん、「解けない」という事実はその論理体系内で証明できるものもある。(できない場合は「できない」という事実を証明する。)

これらの議論は、言語・論理プロセス・公理を形式化・記号化することにより数学的に行われる。この分野はヒルベルトに始まりド・モルガン、ブール、ラッセル、フレーゲそして、ゲーデルに至って「不完全性定理」に行き着いた。こういう思考の“地平”では、離散的「言語」による算術「論理」、ノイマン型コンピュータの「アルゴリズム」、力学系における「決定論的プロセス」以上の3つは同等である。そして、いずれもが必然的、決定論的、論理的であるが故の呪縛に捕らえられている。

カオスの発見は、この閉塞状況に一石を投じた。そして波紋は広がりつつある。カオスの性質がこれら決定論的システムの中に潜んでいたのである。確率論的でも、ファジー論理的でもない、ニュートンの世界そのものの中に「反ニュートンの性質」があったのである。「カオスニューラルネットがNP問題を解いた。」というのは実に象徴的な例だといえる。ついでに言うと「フラクタル」というのは、このカオスの幾何学的表現になっているのである。

南方熊楠との関係については、単に僕の趣味である。彼はド・モルガンやブールを勉強していたらしい。最初にこのことを聞いたのは山口昌哉さんからだった。また、彼の手紙の中で数学の対象とするものが「人」と「物」とその共通集合(そこが、また面白い)であるところの「事」である、と言っている点に惹かれる。「事」とは、抽象的な意味での

‘システム’の概念が感じられる。それと、彼の因果観にもそそられるものがある。さらに一言付け加えると、熊楠が興味を持った細菌の生態は、現在、微生物の集団行動を数理生態学的に扱う恰好の対象として研究されており、カオスによるアプローチがなされようとしている。そもそも、メイが発見したカオスのモデルは、生態系の個体増殖モデルであった。

参考図書：最初の2冊は難しいかもしれませんが、一般読者向けに書かれた優れた著書だと思います。

- 「カオスとフラクタル（非線形の不思議）」
 山口昌哉 講談社ブルーバックス
 「数学から超数学へ（ゲーデルの証明）」
 E. ナゲール J. R. ニューマン 白揚社
 「南方マンダラ」南方熊楠コレクション
 南方熊楠 河出文庫
 「科学朝日1993年2月号“巡回セールスマン問題”に画期的解法」 朝日新聞社

新規受入図書案内

(1992.8～1993.1)

総記(000)

(岩波新書)

- 歴史としての社会主義 和田 春樹
 フランスの憂鬱 清水 弟
 心にしみるケニア 大賀 敏子
 ソフトウェアの話 黒川 利明
 現代を読む 100冊のノンフィクション

- 佐高 信
 山内 逸郎
 未熟児 大岡 信
 第十折々のうた 大岡 信
 折々のうた総索引 奥村 宏
 会社本位主義は崩れるか 阿波根 昌鴻
 命こそ宝 沖繩反戦の心 渡辺 浩
 映画カメラマンの世界 大鐘 稔彦
 外科医と「盲腸」 佐々木 芳隆
 海を渡る自衛隊 仙田 満
 子どもとあそび 奥本 大三郎
 千支セトラ 黒田 洋一郎
 ボケの原因を探る 山本 安英
 女優という仕事 長尾 真
 人工知能と人間 吉田 裕
 昭和天皇の終戦史 三浦 元博
 東欧革命 山崎 博康

(岩波ブックレット)

- シリーズソ連社会主義
 1 歴史の中のソ連社会主義 溪内 謙
 2 ソビエトの政治史を読む 石井 規衛
 3 多民族国家・ソ連の終焉 中井 和夫
 4 ロシアの経済改革 山村 理人
 5 ベレストロイカの終焉と社会主義の運命
 塩川 伸明
 沖繩占領の27年間 宮城 悦次郎
 刑事司法改革ヨーロッパと日本 小池 振一郎
 海渡 雄一
 多民族社会アメリカのゆくえ 本間 長世
 有料老人ホームいまここが問題 樋口 恵子
 九十歳の人間宣言 住井 すえ
 アメリカ経済はどうなっているか 上田 信行
 市民農園のすすめ 祖田 修
 希望としての子ども 中野 光
 日本の産業化と財閥 石井 寛治
 北米移民ある女の生涯 新藤 兼人
 熱帯林破壊とたたかう 黒田 洋一

歴史的現在をどう生きるか 弓削 達
雇用平等の最前線 女性労働問題研究会編
世界と日本の先住民族 上村 英昭
外国人労働者と日本 江橋 崇
学校ぎらいにさせないで 石田 一宏
図解コンピュータアーキテクチャ入門

吉岡 良雄
はじめて学ぶ情報処理入門 半澤 孝雄
パソコンこれが「ふつ〜」です 藤井 良彦
帆苅 雅宏

コンピュータがわかる事典 南条 優
英語メディアにみる表現と論理 浅野 雅巳
最新パソコン用語事典 '92-'93年版 岡本 茂他

少国民文化1〜8 少国民文化協会文学部会編

古事類苑全51巻 神宮司庁

哲 学 (100)

臨床心理学大系1〜16 河合 隼雄他編
人生移行の発達心理学 山本 多喜司編
成人発達とエイジング J.W. サントロック著
今泉 伸人編訳

もし、赤ちゃんが日記を書いたら
ダニエル・スターン著
亀井 よし子訳

モタさんの人生3倍増論 斎藤 茂太

赤ちゃんには世界がどうみえるか
ダフニ&チャールズ・マウラ著

カウンセリング入門 水島 恵一
女と男の心理ゲーム ルナ・マリア

新訂・カウンセリング 伊藤 博
来たるべき哲学のプログラム W. ベンヤミン著
道籐 泰三訳

宗教から読む国際政治 日本経済新聞社編
キリスト教の精神とその運命 ヘーゲル著
木村 毅訳

歴 史 (200)

フランス歴史学革命 P. バーク著
大津 真作訳

歴史の人口学序説 P. グベール著
藤田 苑子訳

フランスの革命の心性 M. ヴォヴェル著
立川 孝一他訳

歴史・文化・表象 J. ルゴフ著
二宮 宏之訳
中世文化の 카테고리 A. グレーヴィチ著
川端 香男里他訳
商人と流通 吉田 伸之他編
紀行写真集カナディアン・ロッキーへ

秋山 秀一
風景の構図地理的素描 千田 稔
ミュンヘン倒錯の都 今泉 文子
渡来人・高麗福信 相曾 元彦

古代日本人の外国観 井上 秀雄
マリア・テレジアとその時代 江村 洋
現代地理学 村上 誠
クアトロ・ディステイント 安藤 武子

近代のドイツの辿った道 A. J. P. テイラー著
井口 省吾訳

洛中洛外 高橋 康夫
バプスブルク帝国1809-1918

A. J. P. テイラー著
倉田 稔訳

地域間対立の地域構造 島田 周平

歴史景観の復原 桑原 公德
アオテアロア 橋爪 若子

ネパールの集落 日本ネパール協会編
カントと地理学 J. A. MAY著
松本 正美訳

江戸幕府撰国絵図の研究 川村 博忠
日本現代史 藤原 彰他著

近世の国家・社会と天皇 深谷 克巳
伊藤博文と明治国家形成 坂本 一登

身分制社会と市民社会 塚田 孝
昭和史I 中村 隆英

写真図説日本の侵略 アジア民衆廷準備会編
満州に送られた女たち 陳野 守正

ぼくらはアジアで戦争をした 内海 愛子編
教科書に書かれなかった戦争

アジアの女たちの会編
川柳にみる戦時下の世相 高崎 隆治

語れなかったアジアの戦後 内海 愛子他編
アジアからみた「大東和戦争」 内海 愛子他編

高校生徹底質問! 従軍慰安婦とは何か
千田 夏光
石原 昌家

虐殺の島 吉見 義明編
従軍慰安婦資料集 吉見 義明

草の根のファシズム 吉田 裕
天皇の軍隊と南京事件 岡崎 正孝

中東世界

1992年日本はこうなる
激動するヨーロッパと世界新秩序

三和総合研究所
R. ダーレンドルフ著
加藤 秀治郎訳

アメリカの分裂
ソ連破壊と社会主義

A. M. ジンガー著
都留 重人訳

国境を超えた社会民主主義

加藤 哲郎
新田 俊三編

日米「危機」と報道
魂にふれるアジア

鈴木健二
松井 やより

パワー・エリート上・下

G. W. ミルズ著
鶴飼 信成他訳

ヨーロッパ社会思想史
新ロシア革命

山脇 直司
藤井 一行

世界の政治改革
インターファクス緊急伝ソ連が消えた日

藤本 一美編
A. ピサレフスカヤ著

国際政治の基礎

月出 皎司訳
斉藤 孝

シンポジウム政治改革と選挙制度
女性・人権・NGO

日本選挙学会編
伊東 すみ子

国際関係思想史研究
現代政治と統治原理

松本 博一
前田 繁一

資本主義国家の構造1・2

N. プーランツァス著
田口 富久治他訳

政治意識の分析
ヨーロッパの政治

京極 純一
篠原 一

政治体系

D. イーストン著
山川 雄巳訳

法哲学概論
法律英語の基礎知識

碧海 純一
早川 武夫

国連もう一つのニューヨーク
国際法

野瀬 久美子
松井 芳郎他著

国際法概説
防災保障と損害賠償

香西 茂他著
岩村 正彦

ブラジルの六法書
仁保事件救援運動史

鈴木 栄蔵訳編
播磨 信義

罪と罰
被害者学入門

岩野 壽雄
諸澤 英道

事実婚を考える
道説刑事訴訟法

二宮 周平
石川 才顕

バール博士の日本無罪論
標的・イシイ

田中 正明
常石 敬一編訳

証言細菌作戦
人体実験

江田 いづみ他編
江田 憲治他編

史実の歪曲
資料・細菌戦

畠元 正巳
日韓関係を記録する会編

証言台の子どもたち
免罪・千葉大学腸チフス事件

浜田 寿美男
大熊 一夫

恐怖の細菌戦
N. イワノフ他著
鈴木 啓介他訳

天皇の戦争責任
東京裁判から戦後責任の思想へ

井上 清
大沼 保昭

グロチュースとその時代
刑事法セミナー1~5

松岡 清
法務総合研究所編

経済分析のための微・積分入門
市場社会の経済学

蓑谷 千原彦
佐伯 啓思

経済学 人・時代・思想
経済学者の時代

E. R. カンタベリー著
上原 一男訳

金利・為替・株価の政治経済学
経済英語和英活用事典

D. R. フスフェルト著
米田 昇平他訳

経済英語和英活用事典
経済英語英和活用事典

植草 一秀
寺澤 浩二

初歩からの経済数学
市場経済の風景

橋本 光憲
三土 修平

バブル・エコノミー
豊かさの伝説

朝日新聞経済部
C. ウッド著

豊かさの伝説
日本経済摩擦の政治学

植山 周一郎訳
P. バイダ著

環境はいくらか
経済動態と市場理論的基礎

野中 邦子訳
G. S. フクシマ著

ポストケインズ派経済学研究会編
資本主義対資本主義

渡辺 敏訳
J. ディクソン著

アフターフォーディズムと日本
地域構造の理論

長谷川 弘訳
M. アルベール著

ミクロ経済学
銀行経営論

小池 はるひ訳
いいだ もも編

経済学史
経済原論

山田 鋭夫編
矢田 俊文編著

仕事と暮らしの経済学
世界市場の形成

奥口 孝二他著
鹿尻嶋 治利著

周辺資本主義としてのアジア
周辺資本主義論

早坂 忠編著
須藤 修

J. Sミル研究
現代の税制改革

島田 春雄
清家 篤

日本のODA
国勢調査以前 日本人口統計集成1~7

松井 透
C. ハミルトン他著

現代の税制改革
日本のODA

山崎 カオル訳
P. リムケコ他編

戦前「家」の思想
母子癒着

若森 章孝他訳
小林 里次

フェミニズム論争
女は世界を救えるか

藤岡 純一
F. ヌシェラー著

女は世界を救えるか

佐久間 マイ訳
佐野 千鶴子

行動理論の再構成	間々田 孝夫	丸元 淑生訳
女子差別撤廃条約注解	国際女性の地位協会編	日本化学会編
女性法学	金城 清子他著	竹本 喜一他著
国際女性 '89 '90 '91	国際女性の地位協会編	立花 隆
労働法	久保 敬治	利根川 進
人間理解のための社会心理学	林 幸範	深海 浩
人間関係学序説	早坂 泰次郎	日本農芸化学会編
労働契約の法理	和田 肇	日本農芸化学会編
しろうと理論	A. F. フェーンハム著 細江 達郎監訳	日本農芸化学会編
イギリス女性運動史	今井 けい	日高 敏隆
子供の愛し方がわからない親たち	斎藤 学	T. クーン著
少年事件	全司法労働組合編	中山 茂訳
青少年条例	清水 英夫	中山 昭一編
	秋吉 健次	重田 定義編
教育相談の心理ハンドブック	中山 巖編著	前田 如矢
子どもと学ぶ道徳教育	吉田 一郎他編	肥満とやせの判定表・図
教室からの改革	佐藤 学	厚生省保健医療局健康増進栄養課編
教室でどう教えるかどう学ぶか	吉田 浦編	医療行政要覧 医療行政資料調査センター編
	栗山 和広編	20代の知的健康法 落合 敏
学校カウンセリング	長尾 博	有賀 雅史
近代日本婦人教育史	千野 陽一	日本化学会編
文学でつづる教育史	伊ヶ崎 暁生	健康・体力コンピュータ診断システムマニュアル
地理にめざめたアメリカ	中山 修一	健康・体力づくり事業財団編
民俗服飾文化	徳永 幾久	起立性調節障害 木村 隆夫
日本の祭り 旅と観光1~7	日本の祭り研究会編	現代健康教育学 坂本 吉正他著
日本服装史	佐藤 泰子	
服飾の中心にある美的感情	丹沢 巧	

工 学 (500)

自然科学 (400)

飽食の予言	岡庭 昇	大器環境論 河村 武
「機能性食品」全ガイド	時事通信社編	図学演習 図学研究グループ編
集団給食献立作成マニュアル	赤羽 正之他著	暮しの工学 木下 邦夫
「集団調理用食品」成分表	女子栄養大学出版部	建築ガイドブック西日本編 新建築編集部編
食品の栄養素量順位表	菊地 亮也	町並み保存のネットワーク 宮澤 智士編
食品のおいしさの科学	石倉 俊治	イギリスはおいしい 林 望
イワシ読本	外山 建三	環境にやさしい暮らしの工夫 環境庁編
ビタミンCの知られざる働き	三羽 信比古	廃棄物とリサイクルの経済学 植田 和弘
食品の生体調節機能	千葉 英雄	裁ち方・縫い方質問集 文化出版局編
韓国の河川地形	金 萬亨	暮らしの安全白書 小若 順一編
現代理論地図学の発達	金窪 敏知	環境を考える 名古屋大学公開講座委員会編
回帰分析のはなし	藁谷 千鳳彦	図説地球環境 Jon Erickson著
理系のための独創的発想法	ミグダル著	大隅 多加志訳
	長田 好弘著	衣服の供給と消費 日本家政学会編
光学活性体	野平 博之	消費生活経済学 伊藤 セツ他著
新老年学	折茂 肇編	東京のまちづくり 藤森 照信
〇A化時代の食生活	高木 和男編著	世界の建築術 小澤 尚
食生活論	鈴木 正成編	若山 滋
食べるクスリ	ジーン・カーパー著	TEM研究所著
		脇 英世
		テキスタイル辞典 テキスタイル辞典編集委員会

いま蘇る味の世界

林 定子編

文学(900)

いま、水が危ない!!

川端 晶子編

先端技術と経済

日本水質研究会編

藤井 美文

ゲーテ全集1~15別巻

ゲーテ著

NHK電子立国日本の自叙伝上・下

菊地 純一

山口 四郎他訳

毛利衛、ふわっと宇宙へ

相田 洋

潮出版社編

毛利 衛

ゲーテ読本

田中 貴子

<悪女>論

三枝 和子

ひとひらの舟樋口一葉の生涯

トマス・ハリス著

羊たちの沈黙

菊池 光訳

産 業(600)

日本探偵作家論

権田 萬治編

マザコン文学論

山下 悦子

日本文学新史(現代)

長谷川 泉編

文芸年鑑1992

日本文芸家協会編

明治・大正・昭和作家研究大辞典

作家研究大辞典編纂会編

郵政百年史資料1~30

郵政省編

マーケティング進化論

三浦 一

広告大百科1~8別巻

電通出版事業部編

花のサークル・リース

櫻井 忍他著

江戸の幾何空間

野口 武彦

男流文学論

上野 千鶴子他著

海の文学志

尾崎 秀樹

少年探検隊

池内 紀

母という経験

宮迫 千鶴

文学のなかの地理空間

杉浦 芳夫

宮本輝書誌

二瓶 浩明編著

詩をよむ鍵

大岡 信

芸 術(700)

手づくりのうたが聞こえる

黒川 訓

イラストレーション2500

ラリー・エバンス

肥満のスポーツ医学

小野 三詞

妊娠婦のためのスポーツ医学

室岡 一

糖尿病のスポーツ医学

池田 義雄

腰痛のスポーツ医学

柄田 幸徳

最大酸素摂取量の科学

山地 啓司

キャンププログラム1

日本野外教育研究会編

スポーツことわざ小辞典

野々宮 徹編

語 学(800)

英語これならドンドンわかる

鷗沢 戸久子

五感の英語表現

田中 実

英語史で答える英語の不思議

速藤 幸子

毎回でるTOEFL・TOEICの英熟語

山口 昌彦編

マン・ツー・マンドイツ語ゼミナール

信岡 資生

ドイツ語のステップ

関口 存男

新ドイツ語の基礎

関口 存男

Keep Keep

櫻庭 信之他編

英語類語用法辞典

丸井 晃二郎

日英辞典

竹林 滋編

現代翻訳考

中村 保男

和英イディオム辞典

青木 誠三郎